



PRESS RELEASE

令和 7 年 6 月 17 日

子宮を切除することなく子宮頸がんを治す取り組み ～治療終了後の妊娠が可能に～

◆発表のポイント

- ・子宮摘出を余儀なくされていた子宮頸がんの患者さんを対象に、子宮を摘出することなくがんを治癒させるための新たな治療法の開発を始めました。
- ・手術前に抗がん剤を投与することで、再発のリスクを抑えながら安全に縮小手術を実施することが期待できます。
- ・治療終了後、再発がないことが確認できれば妊娠を目指すことが可能になります。

岡山大学学術研究院医歯薬学域（医）周産期医療学講座の長尾昌二教授（特任）、同学術研究院医療開発領域（岡山大学病院・産科婦人科）の依田尚之助教、岡山大学病院産科婦人科の谷岡桃子医員の研究グループは、術前の抗がん剤投与で腫瘍を縮小させた後に子宮頸部円錐切除術、腹腔鏡下骨盤リンパ節郭清を行うことで、これまで子宮摘出が必要とされてきた IB2 期、IB3 期（転移がなく、2cm 以上のサイズの腫瘍を有する）の子宮頸がんの患者さんの子宮を温存する新たな治療法の開発を始めました。

ヨーロッパでは散発的に同様の試みが行われていますが、きちんとした臨床研究として安全性を担保した上で実施するのは世界初です。この治療法が確立すれば、子宮頸がん罹患した若年の患者さんが将来の妊娠の機会を失うことを防ぐことができるようになります。

2025 年 5 月 27 日、学内の倫理審査委員会で承認され、6 月 1 日より研究に参加する患者さんの募集を開始しました。

◆研究者からのひとこと

10 年以上前から取り組んできた研究がやっと患者さんに届けられる段階になりました。将来の妊娠を希望される子宮頸がんの患者さんに希望を届けられるよう頑張りたいと思います。



長尾教授（特任）

子宮頸がんを治療しつつ、妊娠の可能性を残す——そんな選択肢が現実のものとなることを目指しています。がんと診断されても『子どもを持ちたい』という若年の子宮頸がん患者さんが希望を諦めずにすむ未来を拓いていきたいと考えています。



依田助教



PRESS RELEASE

長尾先生から最初に研究のお話をお聞きした時は、そんなことが可能なのだろうかと思直懷疑的でした。ですが、これまで行われたさまざまな研究を調べていくうちに、とても理にかなった治療なのだと考えるようになりました。妊娠を希望される患者様の選択肢の一つとなることを期待します。



谷岡医員

■発表内容

<背景>

HPV ワクチンの導入により欧米の一部の国では子宮頸がんの患者さんの数が減少に転じました。しかし、日本ではワクチン接種の普及が遅れ、特に 20 歳代、30 歳代の子宮頸がんの患者さんに減少の兆候は見られません。晩婚化が進む中、子宮頸がんに対する妊孕性温存手術（妊娠の可能性を残すよう配慮した手術）の開発の重要性はますます高まっています。子宮頸がんに対する妊孕性温存手術として広汎性子宮頸部切除術（下図右）がガイドラインにも記載され、一部の施設で実施されています。しかし、妊娠率が 20%程度と低い一方で、50%程度の高い流早産率が報告されており、課題が残されています。そこで、手術前に抗がん剤投与を行うことでより軽い侵襲で実施可能な子宮頸部円錐切除術（下図左）が導入できないかと考えました。子宮頸部円錐切除術は病変のより小さな方にしか適用できませんが、妊娠率は 40%近く、また、流早産率は 20%程度で一般の妊婦さんとほぼ変わりありません。手術前に投与するための有効な抗がん剤について 10 年以上にわたって探索してきた結果、パクリタキセル毎週投与＋カルボプラチン 3 週ごと投与（dose dense TC 療法：ドーズデンス）が非常に有効で、90%以上の患者さんに有効であることがわかりました。





PRESS RELEASE

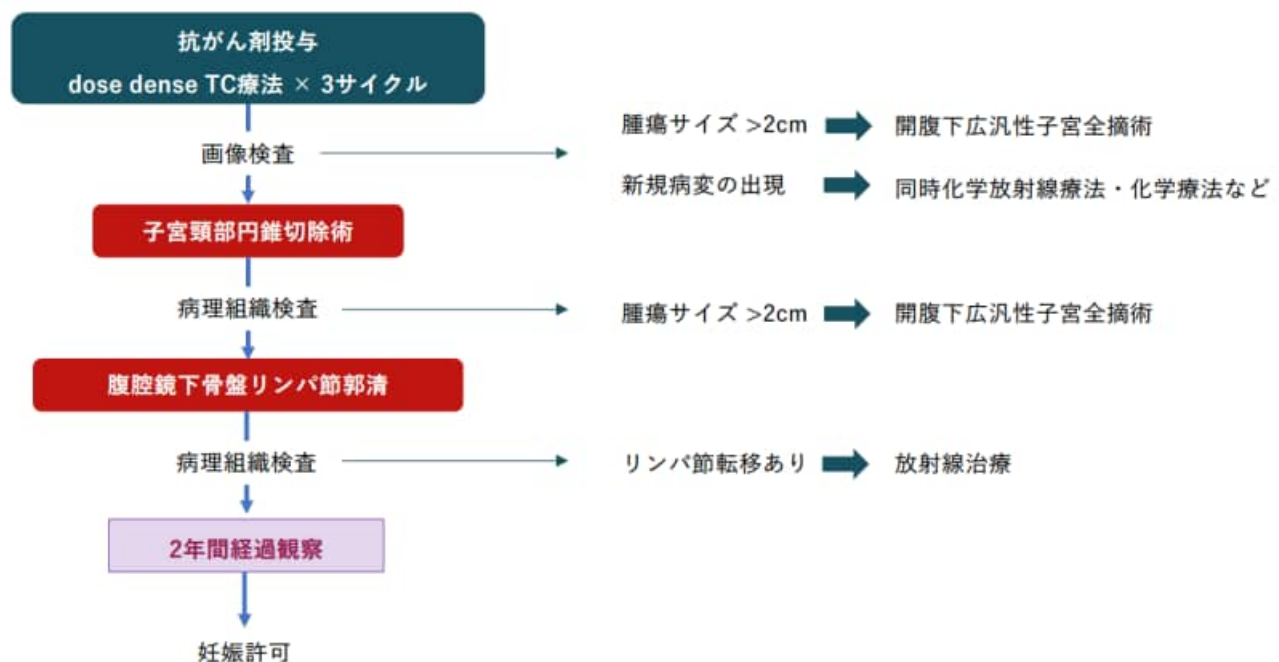
<研究の内容>

対象患者

- ・ IB2 期および IB3 期（子宮にのみに限局した 2cm 以上の腫瘍）の子宮頸がんを有すること
- ・ 40 歳未満
- ・ 将来の妊娠を希望されていること

条件を満たした患者さんに文書で同意をいただいたのち試験に参加していただきます。参加いただいた患者さんは、下の図のような順序で治療を受けていただきますが、抗がん剤投与、子宮頸部円錐切除術、腹腔鏡下リンパ節郭清と治療が進むごとに治療が順調に進んでいるかどうかチェックします。もし、予定通りの効果が認められない場合には、安全性の確保のため研究への参加を中止し、通常診療通りの治療を受けていただきます。8 割程度の患者さんが予定通りの治療を完遂できると見込んでいます。治療終了後、2 年間の経過観察ののち妊娠を許可します。

無事に子宮を温存できた患者さんの割合、2 年以内に再発された患者さんの割合、妊娠・分娩に至った患者さんの割合などでこの治療法の有効性・安全性を評価します。



2025 年 6 月 1 日から患者さんの募集を開始し、10 人の患者さんに参加いただく予定です。

この研究に残された課題として、術前に使用する抗がん剤の卵巣への影響が考えられます。2 割程度の患者さんが治療後は無排卵状態になる可能性があります。治療開始前に卵子凍結、受精卵凍結などの対策をされることをお勧めしています。当院で対応できますが、ご希望があれば協力施設にご紹介します。



PRESS RELEASE

■論文情報

論文名 : Phase II study of a new multidisciplinary therapy using once every 3 week carboplatin plus dose-dense weekly paclitaxel before and after radical hysterectomy for locally advanced cervical cancer

掲載紙 : *Int J Clin Oncol*

著者 : Nagao S, Yamamoto K, Oishi T, Yamaguchi S, Takehara K, Shimada M, Kigawa J.

DOI : 10.1007/s10147-020-01787-7.

■研究資金

本研究は、岡山大学臨床研究支援制度の支援を受けて実施しています。

<お問い合わせ>

岡山大学学術研究院医歯薬学域（医）周産期医療学講座

教授（特任） 長尾 昌二

（電話番号）086-235-7320



岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY



岡山大学は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。